

北海道がんセンターの歴史



独立行政法人 国立病院機構

北海道がんセンター 院長 近藤 啓史

私

がこの春院長に就任し、当センターの将来像を描くにあたり自院のことを何も知らないことに気付きました。

平成4年4月に大学より出向して以来、「前身は札幌陸軍病院で終戦後国立札幌病院と改称し、白石遊郭隣の現在地に移転してきた。月寒の札幌第一高校の地が当院の前身札幌陸軍病院の跡地で、その近辺にまだ宿舎がある」といったぐらいのことしか知りませんでした。

なぜ現在地菊水に移転したのか、なぜがん専門病院になったのか等々疑問がでてきます。昔の記念誌などを掘り起こし調べると幾多の先人の思いが伝わるようでありました。がんセンターとして将来発展の礎とするために現在まで調査探索したことをこの場を借り、発表したいと思います（資料1）。

当

センターの歴史を振り返ってみますと、明治29年月寒に札幌衛戍病院（その後札幌陸軍病院）として創設、終戦により昭和20年12月厚生省に移管され、国立札幌病院として発足しました。

明治時代中程、時の政府は第七師団を北海道に作るにあたり、屯田兵を母体と考えていました。その付属病院として発足したのが当院の始まりです。しかし第七師団は数年後旭川に本拠地を移し、札幌には歩兵第25連隊が残ることになり、そのため病床数規模はそれに見合った70床程度だっ

〈資料1〉沿革

- | | |
|-----------|---------------------------------------|
| ・明治29年 | 札幌衛戍病院（その後札幌陸軍病院）として開院（月寒） |
| ・昭和20年12月 | 国立札幌病院（厚生省に移管）に改称 |
| ・昭和27年 | 当地（菊水）に進出して市内診療所を開設 |
| ・昭和32年 | 16診療科 450床 鉄筋の総合病院となる |
| ・昭和42年 | 道内初のリニアック導入 |
| ・昭和43年 | 北海道の要請により北海道地方がんセンターを併設
がん病棟100床増築 |
| ・昭和58年 | 第三次救急医療施設併設 |
| ・昭和61年 | 現在の施設になる（昭和54年から7期にわたる更新築） |
| ・平成16年4月 | 独立行政法人移行に伴い「北海道がんセンター」となる |
| ・平成17年1月 | 地域がん診療拠点病院に指定 |
| ・平成21年2月 | 都道府県がん診療連携拠点病院に指定 |
| ・平成22年3月 | 救命救急センター部門が北海道医療センターに機能移転 |
| ・平成24年4月 | 口腔外科を新設し、26診療科 460床の運用となる |
| ・平成24年10月 | 病院前駐車場の購入 |

たとのことでした（資料2）。終戦後は主に復員軍人や引揚者の1次診療施設として病床数450床、実収容者数200床位で稼働していたようです。

短期間ですが昭和20年9月に月寒の病院は進駐軍に接收され、定山溪の「定山溪ホテル」「章月旅館」などを借り上げ、患者の分散収容と一時的な診療しています。翌年4月進駐軍の札幌市内移動とともに返還になっています。また昭和20

〈資料2〉札幌陸軍病院



年12月に当院に移管された旧航空隊八雲分院は昭和23年国立八雲病院として分離独立しています。ここには裏話があり、進駐軍の長期接収となれば八雲に移転しようという考えもあったそうです。それは後日付属の江別診療所開設にもつながります。札幌市内移転が難航していたとき、江別町民の要望に応じて江別診療所（その後江別市立病院）の新設（昭和23年3月）を行いました、本院にしようという考えもあったとのこと。

昭

和22年6月北海道大学医学部の

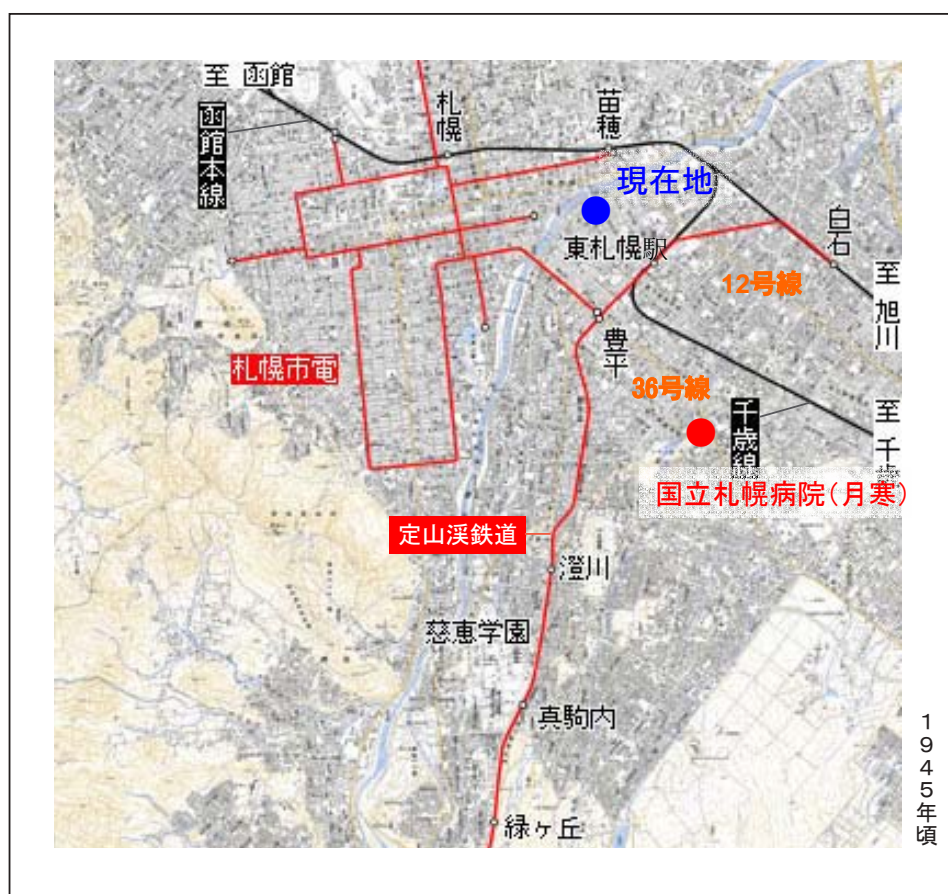
全面的な応援を得て診療することになりました。すなわち北大第2外科柳 壮一教授に当院院長を併任して頂き、副院長佐々木幸（第1内科）、田畑（産婦人科）、柳内（耳鼻科）、外塚（皮膚泌尿器科）、近藤（精神科）各先生、いずれも助教授講師級の先生を医長として任命していただきました。苦労の連続だったようです。「夜遅くまで手術をして頑張った。インターンと仕事をし、そして痛飲した」と田畑武夫先生の私本にも書かれていますし、院長心でだった柳内恒久先生も「札

幌から自転車に乗って月寒街道を通り、ジャガイモと澱粉でこねた弁当を広げて、医局であれこれ将来を語った」と述べています。

しかし開設当時からの病院の老朽化、人口過疎地、交通事情の悪さ、とくに札幌市内からは市電で豊平橋を越え定山溪鉄道と交わる豊平駅（豊平3条8丁目）まで行き、そこから1時間に1本程度のバスに乗り換えないと行けない不便さがありました（資料3）。通勤職員は電停から30～40分か歩いたと、当時の記録に残っています。このため移転計画が始まります。

柳院長、有末四郎地方医務局長らの奔走のおかげで、旧白石遊郭の裏手に元市議員で札幌市政功労者村岡勝恵氏らが所有していた5000坪余りのこの地を見つけることができました。そして当時の高田札幌市長、原田助役ほか関係者のおかげで昭和26年現在地に土地を確保、それに相まって27年より始まった基幹病院計画（日本各地区に基幹病院を作るという計画）が当院を国の基幹病院として押し上げ、28年4月重点的整備（第

〈資料3〉札幌の市電、鉄道網



一次基幹病院整備計画施設に指定)が決定しました。これらを梃子に外来診療棟より逐次移転して昭和32年16診療科450床の総合病院として診療を開始します(資料4)。

付属高等看護学院は新看護法のもと昭和22年に設立(病院附設の看護婦養成所を廃止)し、病院移転に伴い新校舎で看護学生は勉学に励むようになりました。

基幹病院としての当院の目標は、国民死亡率の上位を占める脳卒中、がん、心臓病等いわゆる成人病の早期発見、適切医療および研究となっていきます。そのために昭和32年高血圧センター、昭和34年癌センター設置、コバルト照射開始、昭和37年に人間ドック設置、昭和38年糖尿病相談室設置(昭和50年糖尿病クリニック設立)、アイバンクセンター設置と角膜移植開始、昭和39年災害救急指定病院認可がおり広範に領域を拡大していきます(他には母親学級、乳幼児相談室、アレルギー相談室、肝相談室、婦人科がん相談室などがありました)。このことは逆に基幹病院としての当院の特定の性格付けが曖昧になっていきます。

しかし転機が来ます。がん患者の増大という疾病構造の変化がおこり、がん診療の要として、北海道庁及び関係機関からの強い要請と支援をうけ、昭和42年北海道地方がんセンターの併設が決定します。

翌年8月がん専門病棟100床の増床を受け、がん分野の基幹病院として札幌市内はもとより全道的な診療圏を形成するに至ります。また昭和42年には東京以北初めての放射線治療器リニアックが導入されます(資料5)。

地

方がんセンター設立に関しては当時の町村金五北海道知事が諮問機関、がん対策懇話会をつくらせ、その中で、1)道独自の施設をつくる、2)国立病院に併設をするという両案が答申されたとのことでしたが、道の方の予算的制限もあり当院に併設になった次第です。

設立運営委員会は北大名誉教授武田勝男委員長を筆頭に、委員には北大第1外科三上二郎教授、

〈資料4〉移転された国立札幌病院



札幌市菊水西町14丁目

〈資料5〉昭和42年リニアック設置



第1内科村尾 誠教授、札幌医大から第1内科和田武雄教授、癌研内科(現第4内科)漆崎一郎教授と当時の北海道衛生部長村中俊雄先生、当院院長山本修五先生、北海道地方医務局長有末四郎先生8名で構成され、学閥的な傾向を持たぬよう、各科ごとに優秀な人材を登用することになったとのことでもあります。また研究部門は両大学、集団検診部門は対がん協会、集検センターがこれを担当することに決まりました。

現在働いている医師の出身医局、今までの院長人事にもその名残があります。また東京以北初のリニアック導入に関しては、ハイエネルギー放射線医学と物理学を専攻した人を選任しようとしたとのことですが、本州には適任者がおらず理学部出身で放射線医学を専攻していた入江五朗北大助教授を招聘して第3代目の放射線科医長になっていただきました。それから数年後には治療患者数

は国立病院中最大となったとのこと。そして昭和46年北大教授に転任されましたが、当院を現在まで続く放射線治療のメッカにした功績は大変大きいと考えています。

その後も医学の著しい発展と高度化に対応すべく昭和54年から7期に渡って建替えを行い、現在の病院の元となっています（資料6）。この間昭和58年には北海道及び札幌市の強い要望を受け、道央地区の第三次救命救急施設を設置しています（平成22年3月に北海道医療センターに機能移転）。

昭和63年10月には臨床研究部を設置し、悪性腫瘍を中心に5つの研究室を作り、臨床研究に積極的に取り組んでいます。

昭和60年代当院を含め国立病院・療養所はその制度疲労・赤字のため統廃合が叫ばれ、平成16年度から独立行政法人化され、当院は「北海道がんセンター」と改称されました。一部には今までの総合病院の機能を生かして「札幌医療センター」に、という思いもあったようです。

日 本のがん対策は、昭和59年に策定された「対がん10カ年総合戦略」、平成6年に策定された「がん克服新10カ年戦略」、平成16年に策定された「第3次対がん10カ年総合戦略」に基づき取り組んできました。さらに、がん対策のより一層の推進を図るため、がん対策基本法が平成18年6月に成立し、平成19年4月に施行され、基本法に基づき、がん対策を総合的かつ計画的に推進するための「がん対策推進基本計画」が平成19年6月に策定されました。この中で当院は平成17年「地域がん拠点病院」に、その後平成21年2月に「都道府県がん診療連携拠点病院」に指定され、名実ともに道内のがん診療の中心的な役割を担っています。

これからは道内唯一の都道府県がん診療連携拠点病院として、20カ所の地域がん診療連携拠点病院の先頭に立ってがん診療に邁進するとともに、がん患者の多くは高齢者でありますので、併存疾患の循環器疾患、糖尿病、皮膚疾患、眼疾患、口腔内トラブルなどの生活習慣病もともに診療でき

〈資料6〉 国立札幌病院



る体制を取っていきたいと考えています。また痛みと心のケアを行う緩和ケアセンター、子供も含めた骨・軟部肉腫の診療をするサルコーマセンター、10月に手術支援ロボット「ダヴィンチ」の導入も決まり、泌尿器科、婦人科、消化器外科および呼吸器外科などを中心に、高度先進内視鏡外科センターを立ち上げ、新たなステージに向かうがんセンターを作っていきたいと考えています。

札幌陸軍病院、国立札幌病院そして北海道がんセンターの歴史の概略についてみてきました。まだ知り得ない歴史もあるかもしれません。歴史の中に埋もれた事柄がありましたら、広く皆様方にご教示をお願いしたいと思います。

参考：当院記念誌、白石区ホームページなど
(平成25年9月2日第1稿)

・発行元・